

埼玉県退職校長会 会報

題字・石田孝作
第166号
平成31年4月

雑感 (現職校長さん方の悩みに接して)

埼玉県退職校長会副会長 石原 完



退職校長会の役員は、支部の福利厚生部員になって以来、今年で十余年となる。

この間、学校現場では、新指導要領実施に伴う「授業時数の増加」「道徳の教科化」「小学校英語の導入」さらに「新しい感覚を持った若手教員の増加」等々、凄まじい勢いで変化を続けている。

一方、ここにきて「教員の働き方」についても多くの論議がなされている。教員の勤務時間は、平成十八年度の調査と比較し、平成二十八年度

調査では、職名により異なるが、週当たり二時間から五時間増加し、中央教育審議会から「働き方改革に関する総合的な方策」の答申が今年一月出された。(詳しくは前回の会報で、小野田小学校校長会長さんが記述されている)

この答申では冒頭に「子供のためであればどんな長時間勤務も良しとする働き方は、教師という職の崇高な使命感から生まれるものであるが、この中で教師が疲弊していくのであれば、子どものためにならないものである」と述べ、長時間勤務の要因として、「若手教員の増加」「授業時数の増加」「部活動の過熱化」「家庭地域の教育力低下に伴う学

- ① 巻頭言
- ② 理事会報告
- ③ いまを生きる
- ⑩ 定期総会案内
- ⑪ 一人一言
- ⑬ 長寿会員
- ⑭ 物故会員
- ⑮ 研究調査報告
- ⑯ 文芸

校・教師が担う業務範囲の拡大」等を挙げている。

教育委員として、学校訪問や会議等で、現職の校長先生方に接する機会に静聴することは、「先生方に、教師が教師としてやりたい仕事(子供との触れ合いを含んだ様々な教育活動や、得意分野の教材研究等々)十分にできる時

間や環境を創ってやりたい」という思いや願いである。現在の学校がいかにも本来の教育以外の業務を抱えているか目の当たりにする思いである。

また、若手教員の指導の悩みも窺うことができる。「自分たちが受けてきたような指導では、若手の先生方は萎縮してしまい付いて来ない」等の実感も吐露されている。

変貌していく学校、「日本型教育」を支えてきた教師の熱い使命感までも、変化してもらいたくないと思う昨今である。

信頼される機関

児玉支部長 櫻井 堯



新聞報道(読売新聞二月二日付)に「少女の命 なぜ救えず」と大きな見出しがあり、さらに「行政・学校 薄い危

機感 千葉・小四死亡」とあった。これは、千葉県野田市の小学四年の栗原心愛(一〇歳)さんが自宅で死亡した事件である。しかも加害者が父親であった。この子に何があったのであろうか。動物さえずりを慈しみ大切に育てると

に自分の親の悪口を言われるとそれを否定し怒るといふ。子の親への情の深さである。恐らく心愛さんも親に愛されたい、好かれたいという気持ちがあったことであろう。それを無残にも打ち砕いた父親、母親の言動は許されない。しかし、この事件は、見出しにもあった「少女の命 なぜ救えず」という課題は奥深いものがあり、それを学ばなければならぬと思う。行政、学校の対応が、この子を救うという強い意思があれば、父親の対応に毅然と対応できたと考えたと無念であり、残念なことであった。この子の発した「SOS」のコピーを、その父親へ渡すなど言語道断であり、行政としての認識を欠いている。それぞれの組織が圧力に負けず、きちんと機能していかなければならぬ。そうしなければ、この子は浮かばれない。ましてや、児童相談所という信頼すべき機関である。その組織はどんな圧力にも負けてはならないのである。